

## 2. 5. 1 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

### 2. 5. 1 ふくしま学 (楽) 会

ふくしま学 (楽) 会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も7月31日に第10回が富岡町で、1月29日に第11回が大熊町で開かれた。

#### (1) 第10回 ふくしま学 (楽) 会

第1部【1F 廃炉の先を考える】で3年次の渡邊光季が「話せばわかる、話せば変わる：いわきを越えた学びを通して」をテーマに報告をした (写真)。



第2部【福島浜通り地域社会の将来像を考える】では3年次の三村咲綾が「ひとりひとりが取り組む防災」をテーマに報告を行った (写真)。



発表資料は以下のサイトに掲載してある。



また、第4部【総括セッション】では本校副校長の南郷市兵と渡邊光季がパネリストとして参加した。

#### (2) 第11回 ふくしま学 (楽) 会

2年次の佐藤志保が「なぜ処理水の海洋放出に反対運動が起きるのか 創造的未來を考える」をテーマに発表した (写真)。



高校1年生の時のワークショップを通じて、それまでは「何となく危険」と感じていた処理水を、「安全なこと」と思い始めた。しかしその後、処理水放出を巡って、ネット上で賛成派と反対派が論争を繰り返していると知った。賛成派は、国や東電が伝える科学的な安全や海洋放出することのメリットといった「正しい知識」に基づき、「反対派は『正しい知識』を持っていない人」と単純化して攻撃しているという。

このことを通じて「自分の中にも、これに近い思考回路があったかも」と思うようになり、対立の要因は、反対する人たちを理解しようという気持ちが足りないからではないか、と思い調査を始めた。

風評被害への懸念。国策として原発政策を推し進めた東電や国への不信感。原発事故以来続く先が見えない暮らしの不安感、反対の理由は人によって様々なことに気づき、「なぜ反対しているのかに目を向けて真摯に対応しなければ、本当の心配や不安を解消することができない」と考えるようになった。

発表の最後に、聴衆にこう呼びかけた。「問題が起きてから他人を責め、自分は関係ないという態度をとってほしくない。私たちにはいま、考えるチャンスがある」と。

## 2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

### (1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。今年度は、富岡町文化交流センター・学びの森に一部の児童生徒が集まり、その他の児童生徒は各校からオンラインで参加する、現地・オンライン併用での開催となった。また、今回で第9回目を迎えたが、初めての双葉郡内での開催となった。

### (2) 実施内容

本校からは、高校3年生が「ひとりひとりが取り組む防災」というプロジェクトを行っている高校3年生の生徒が代表として発表を行った。防災×歴史をテーマに、震災の教訓は歴史的にきちんと残されており、それをどのように活かしていくのが重要であると発表した。

また、防災と要配慮の避難の観点から、これまで学校で行われた避難訓練をアップデートしていく必要について説明し、校内の避難訓練を学校の先生と話し合いながら作り変え、避難訓練の後に校内でワークショップを行った。高校生の力が地域の防災力を向上させる必要性があると発表した。



### (3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。特に今年度は震災後初の双葉郡での開催という意義は大きい。双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

## 2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も以下の4件を応募した。

このうち、書類選考に応募した2件が最終選考に選ばれた。最終選考会は9月10日(日)、自治会館(福島市)でオンライン開催された。県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。

審査の結果、以下のような結果となった。

#### <最優秀賞> 1プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 みらい防災  
プロジェクト名:「ひとりひとりが取り組む防災」
- ・ふたば未来学園高校  
社会起業部カフェチーム  
プロジェクト名:「可能性はここから始まる!! Café ふうよ変革者たれ」

#### <入選(社会貢献賞)> 2プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 ニューヨークチーム  
プロジェクト名:「浜通りツアー」  
活動名:原子力防災探究ゼミ 個人  
プロジェクト名:話せばわかる、話せば変わる  
〜いわきを超えた学びを通じて



令和元年度より本コンテストに参加し、過去4回中3回目の最優秀賞を獲得できた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。また、各学校の発表内容が充実しており、福島県でも探究文化が定着してきたように感じる。

## 2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「全国高校生マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO 法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 Summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。

校内選考会には高校1年生～3年生まで14件の応募があった。1年生から4件の応募があり、早期に探究に取り組み自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。参加した生徒全員に、自身の活動の質をより高めるために、審査を行った先生からコメントを後日配布した。

### ○マイプロジェクトアワード福島県 Summit

#### 校内選考会概要

実施日：令和4年11月21・22・24日(月・火・木)

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員5名、カタリバ1名

校内代表を選考する審査会では、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など様々な議論になった。今年度から、初めて未来創造探究やマイプロに関わる先生もいる中で、このような議論ができたことは、審査員にとっても探究やマイプロジェクトの意義を考え直すきっかけになったのではないだろうか。

最終的に14件全てのプロジェクトが、福島県 Summit に出場する校内代表に決定した。

選考会を通じて生徒のプロジェクトを評価することは、単に代表者を選ぶだけでなく、本人達の活動をさらに進化させるためにも重要であったと考える。参加した生徒からは、「緊張したけどアドバイスをもらうことができよかった」、「答えられない質問があったから悔しい。もっと頑張りたい」など、前向きな声が聞かれた。

発表後の質疑応答で、審査員から問いかけをもらう中で、自身にない様々な視点に気づくことができたようだ。

## 2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 Summit

マイプロジェクトアワード福島県 Summit は全国 Summit に向けた福島県予選として、今年度で3回目の開催となる「学びの場」である。本校からは校内選考会によって選出された13件が参加し、3年生のプロジェクトである「誰ひとり取り残さない減災・防災」が福島県代表として全国 Summit に出場する運びとなった。

実施日：令和5年1月22日(日) 終日

実施形態：オンライン

発表数：32件

本校からの発表テーマ

- 誰ひとり取り残さない減災・防災 (3年)
- 福島と世界の架け橋プロジェクト (2年)
- 私たちと少年法 (2年)
- 葛尾村に人を呼ぶために (2年)  
～葛尾村の自然とツーリングを活用して～
- 川内村の魅力を発信！ (2年)
- 表現するファッションとは (2年)
- スポーツブランドをもとに地域を盛り上げる (2年)
- Come to Futaba (2年)
- メンタルの状況はスポーツにどう影響する？ (2年)
- Café ふう売上あげあげプロジェクト (2年)
- My Dream KIRAKILIVE (1年)
- 震災教育を教育で終わらせないために (1年)
- 神社を盛り上げて地域のつながりを作りたい (1年)



本年度の福島県 Summit は「学びの場」として実施された。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。分科会では、福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から質問や感想をもらい、自身の活動の内容について対話を行った。発表終了後の振り返りでは、自身の学びや気づき言葉にするとともに、今後の活動をについて考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、さらなるモチベーションにも繋がったようだ。



## 2.6.1 社会起業部の活動

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、福島を訪れる高校生との交流や、自分たちも地域や原発事故を考えるためにフィールドワークを行った。またパンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

### (1) 社会起業部×早稲田大学 (4月13日)

社会起業部の新入生歓迎イベントの一環で早稲田大学の学生さんと「オンライン進路座談会」を行いました。

### (2) 広野町の限界集落・箒平を訪問 (6月20日)



### (3) 灘高校など関西の高校生と交流 (7月28日)



### (4) 横浜緑が丘高校さん双葉町をアテンド(8月1日)



### (5) 宮城研修 (8月3~4日)

福島県についての説明や食材を寄付することを目的に宮城研修へ。気仙沼東日本大震災遺構・伝承館では社会起業部のように語り部活動をされている気仙沼向洋高校の方と交流しました。南三陸町と石巻でのフィールドワークで津波被害について学ぶとともに、それをどう伝承していくかも考えさせられました。最後に石巻市で子ども食堂を行っているオアシス教会さんを訪問し、福島県産の食材を寄付しました。



### (6) 沖縄基地問題学習ワークショップ (8月19日)

年末の沖縄研修の事前学習として明治大学、慶応義塾大学、中央大学の学生さんらとともにワークショップを行いました。

### (7) 滋賀県河瀬高校さんと交流 (8月23日)



### (8) 「戸村さんに聞くカムのこと」(10月3日)

大熊町出身で本校のカフェに勤務する戸村さんに、大熊町にあったカムラ洋菓子店についてお話しいただき



した。

**(9) 木村さんと沖縄事前研修 (10月19日)**

津波で命を落とした家族の遺骨捜索を続ける傍ら、語り部として活動している大熊の木村紀夫さんをお招きして、沖縄研修の事前学習を行いました。みなで沖縄で遺骨収集されている具志堅隆松さんの『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。』を読みました。



**(11) 福島放送「シェア！」に動画提供 (6月・10月)**



**(12) 中央大附属高校さんと交流 (10月27日)**

中央大附属高校の川北慧先生は福島と沖縄の類似点を踏まえ、生徒に対して福島研修・沖縄研修を行っている。昨年に引き続き福島研修では本校生徒と交流の機会を作ってくれた。本校での沖縄研修に当たり中央大附属高校さんの沖縄研修に一部相乗りさせていただけることになっている。

**(13) 岐阜県の中京高校さんと交流 (12月21日)**



**(14) 沖縄研修 (12月22~24日)**

福島原発立地の構造が沖縄の米軍基地の構造と似ていることに気づき、沖縄県宜野湾市辺野古で基地問題について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の沖縄研修を企画した。



事前研修を経て(講義動画を左下リンク先に掲載する)、初日はホテルにて福島県のリンゴを配布しアピールを行った。



二日目は辺野古に移動し、(12)で述べたように中央大附属高校さんと合流、川北先生のもとフィールドワークをおこなうとともに基地移転容認派と反対派の住民のお話をうかがった。



生徒は「原発と基地の構造が似てる。国防のために沖縄が基地を引き受けている」「沖縄・福島・水俣と、住民を分断するような点がある」という感想を持った。三日目はひめゆり平和記念資料館などを訪問した。辺野古フィールドワークの詳細については右QRコード先にある社会起業部 Facebook に記載している。





## 2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

### (1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、イベントの企画・開催など、生徒主体で活動している。

### (2) 実施内容

昨年度までは新型コロナウイルスの影響によりカフェの営業が制限されることが多かったが、今年度に入ってからは徐々に規制が緩和の方向に進むことを期待し、「ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供する」をテーマに季節ごとに限定メニューを提供すること、地域のイベントに率先して足を運ぶことを中心として活動した。

### (3) 成果

#### ①第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード予選 7/30 (土)

3年の和賀菜々香、佐川生華の2名がオンラインにて本校caféふうの取り組みについて発表を行った。A・B・Cの3つのグループごとに予選が行われ、本校はAグループにて予選に挑んだ。オンラインであっても普段のカフェの様子を見ていただきたいと予選当日はカフェチームの1・2年生の協力によりカフェを開店・営業し、営業中のカフェの様子を交えながら発表を行った。

予選ののち、各グループ上位2校が8月に三重県伊勢市にて行われる決勝に進むことができるが、本校は「輝」の受賞とともに決勝進出校に選出され、全国各地において多方面で活躍する方々の前で本校の取り組みについて発表する機会を得ることができた。

#### 第7回全国高校生 SBP 交流フェア チャレンジワード本選(予選)-グループ A 2022.7.30(土)

- 1: 熊本県立天草総合高等学校 天草総合高校 SBP
- 2: 岐阜県立加茂高等学校 森林科学校
- 3: 三重県立明野高等学校 ぶかりプロジェクト
- 4: 三重県立伊勢高等学校南勢校舎・産科校舎 南伊勢高校 SBP
- 5: 法政大学中学校・高等学校 社会科学部地域調査班・地域創造コース
- 6: ふたば未来学園中学校・高等学校 社会起業部 カフェチーム
- 7: 佐賀県立伊万里東葉高等学校 フードプロジェクト
- 8: 三重県立紀南高等学校 きにゃんプロジェクト
- 9: 三重県立高等学校 ダンス部 SERIOUS FLAVOR



#### ②第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード決勝 8/20 (土)

コロナ禍で活動が制限される中で自分たちに何ができるか、コロナ禍だからこそやれること・やるべきことを問い続け、『可能性はここから始まる～caféふうよ変革者たれ～』のテーマを掲げ、三重県伊勢市で開かれた決勝に参加した。決勝ではA・B・Cの3つのグループから勝ち上がった計6校による発表を行なわれた。

本校カフェチームは、入学から今までの活動期間中にコロナ禍での飲食店経営の厳しさや交流を深めることの難しさに直面した経験から、『カフェで待っているだけでは何も変わらない』とカフェを飛び出し自分たちから地域に出向いていくことで新たな交流を生み出そうと試みたことを中心に発表した。今年度のカフェチームは、交流するための活動だけでなく、カフェの経営視点やお客様に喜んでいただく経営・営業とは、といった様々な視点から「Four Seasons Menu」をテーマに取り上げ、季節限定メ

ニューを提供している。今年度最初の限定メニューとして夏限定のメニューを考案・提供した結果、売り上げや集客、お客様の反応にどのような影響があったかを分析・発表した。

輝・NARUMI賞(特別賞) 受

③第7回全国高校生SBP交流フェア 8/20(土)  
上記②チャレンジワードの後、三重県伊勢市の皇學館大学にて行われているSBP交流フェアに参加した。普段は双葉郡を中心として活動しているため、全国各地から来場された方々と交流できる貴重な機会となり、改めて自分たちが行っている活動を見つめ直す良い機会となった。また、参加・来店していただいた高校生から、形は違えども同じ高校生が社会貢献・地域貢献や経営、地域活性化など私たちが目指す活動に取り組んでいる内容について、お互いに直接意見を交換でき、新たな発見につながる機会となった。

#### 第7回全国高校生SBP交流フェア

2022.8.20(土)



#### ④ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト 9/10(土)

本校カフェの取り組みについて、「社会貢献」の視点から発表を行った。双葉郡8町村にスポットをあて、1か月1町村をテーマに地域を知り、自分たちも伝統や文化を学ぶことでカフェの活動にそれらを取り入れ地域に伝えていく活動を紹介した。社会起業部カフェチームは日頃から「変化 交流 居場所が生まれるカフェ」をコンセプトとして活動している。そのため、カフェを「交流が生まれる場所」と定義しており、カフェの活動を通して年齢や性別、地域を問わず様々な方との交流の場となるよう活動している。今回はその一助となるよう、地域の伝統や文化について実際に体験し、出来上がったもののカフェに置いて紹介することでカフェに足を運んで下さった方に地域の伝統文化に触れていただく・知っていただく活動を発表した。「双葉町のふたばダルマ」を製作し、カフェに紹介POPと共に店頭へ置く、「檜葉町の藍染め」を体験し、作ったスカーフをお客様の目につくようにカフェ営業時に身に着けるなど自分たちならではのやり方で地域の情報を発信し、双葉郡を知っていただく活動に繋がった。他にも双葉郡8町村についてより知っていただくために、カフェ内の壁を使い、中学・高校の美術部と連携し双葉郡8町村をテーマとして壁画も作成し、故郷への想いを感じていただいた。

優秀賞(2位相当)・社会貢献賞  
受賞

#### ④ふたばワールド in 双葉(双葉町) 9/23(金)



震災後、双葉地方の交流の場として年1回開催されていたふたばワールドは、新型コロナウイルスの影響で開催が見送られていたが、今年は3年ぶりに双葉町にて開催された。

現カフェチームとしては郊外での初の出店であり、普段カフェにいらっしゃる方々とは違った交流を持つ良い機会であった。当日は、飲み物だけでなくスペシャリスト系列農業が作った広野町産のバナナ「綺麗」を使った「学園マドレーヌ」も販売し、本校のスペシャリスト系列農業の活動とcaféふうの活動の両方を多くの方に知っていただくことができた。また、ふたばワールドを取材にいらっしゃっていた地元テレビ局の方にcaféふうを取り上げていただき、会場に足を運べなかつた方にもメディアを通して活動を伝えることができた。



⑤ならSUNフェス（楡葉町）11/12（土）

楡葉町にて開催されたならSUNフェスに出店した。このような機会を活用し、自分たちから率先して地域の方と交流する機会をもっと持つべきではと考え、自分たちから双葉郡の方々に会いに行こうとイベントに積極的に足を運んだ。



イベントではふたば未来学園にカフェがあることを知らなかつた方もいらっしゃったため、改めて「caféふう」の存在を多くの方に知っていただく機会にもなった。本イベントでは現カフェチームになってから初めて屋外での「ふうブレンドコーヒー」の提供を行った。お客様においしいと言っただけのコーヒーを提供したいと普段から懸命にドリップの練習をしていた部員にとってはより多くのお客様と関わることができ、良い経験を積むことができた。

⑥広野町暮市（広野町）12/24（土）

広野町駅前商店街の活性化とにぎわいづくりのために開かれる「広野町暮市 2022」に出店させていただきました。

当日は強風が吹く中での出店となり、いつものようにスムーズにコーヒーを提供するのが難しい環境であったが、コーヒーを楽しむにしてくださいお客様のためにと丁寧にドリップし、寒い中でのほっと温まる一杯を提供した。当日は隣接するテントにてスペシャリスト系列農業の栽培担当生徒が自ら大切に育てた鉢植えを販売した。農業・カフェのそれぞれが広野町に元気を届けたいという想いを持って参加していたため、新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった広野町暮市に高校生だからこそ届けられる元気と活気をもらすことができた。



(4) 課題

今年度は、ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供することを念頭に運営した。新型コロナウイルス感染症に関する規制が徐々に緩和されるに伴い、店頭での活動の幅が広がっていくことを感じつつも、学校外の方々との交流の持ち方や情報の発信の仕方について、更なる改善の必要性を感じる。学校外の方が学校の中にある「caféふう」に気軽に来店できる雰囲気や環境づくり、SNSによるタイムリーな情報発信など今年度見つけた課題を次年度は生徒主導により解決したい。

併せて今後は生徒主催のイベントを率先して企画し、校内に外部の方を呼び込むことで交流の場としてのカフェの機能を十分に果たせるようにしていきたい。また、他校との交流を持ち意見交換や共同商品開発などを企画し、生徒の中の可能性を広げていくことも課題として挙げられる。

## 2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク (FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、地域の方を取材し、聞いた話を持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決の難しい課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後展開される未来創造探究 (探究活動)を通じて探究することになる。今年度はリッチピクチャーを使って自分達の演劇作品を構造化し、探究への問いづくりへ繋げた。

### (1) 目的

- ① 学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2 年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

### (2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	5 月 24 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション①	○
2	5 月 31 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション②・取材先を決める	○
3	6 月 13 日 (月)	終日	双葉郡バスツアー (終日)	
4	6 月 14 日 (火)	5・6	バスツアー振り返り/取材先調べ	
5	6 月 21 日 (火)	5・6	演劇創作のための取材	
6	7 月 5 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ①	○
7	7 月 12 日 (火)	5・6	演劇創作のためのフィールドワーク	
8	7 月 19 日 (火)	終日	演劇創作 WS ②	○
9	7 月 20 日 (水)	終日	演劇創作 WS ③・中間発表会	○
10	9 月 13 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ④ブラッシュアップ	○
11	10 月 4 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑤ブラッシュアップ	○
12	10 月 25 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑥ 演劇リハーサル	○
13	10 月 26 日 (水)	終日	演劇成果発表会	○
14	10 月 27 日 (木)	5・6	演劇振り返り&分析・リッチピクチャー作成	

### (3) 講師

平田オリザ (青年団主宰 劇作家・演出家)  
 わたなべなおこ (劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)  
 森内美由紀 (青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)  
 宮崎 悠理 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)  
 石本 径代 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)  
 金 恵玲 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)  
 北村 耕治 (俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

### (4) 対象生徒

1 学年生徒名 1 6 班編成

### (5) 授業内容 (抜粋)

1 演劇オリエンテーション





ながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。

中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足りないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- 1 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- 2 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- 3 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのか、劇を見て分かるようになっていないか。

中間発表会でのアドバイスをを受けて、多くの班が作品をガラッと変えた。その軽やかさもまた、演劇を中学3年間実施してきた生徒たちがいる学年ならではの变化だと思われる。

### 1.3 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班20作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点には以下のとおりである。

- ①テーマ（広く見てもらいたいと思う内容だった）
- ②発想力（オリジナリティがあり、ユニークだった）
- ③セリフ（心に響く、印象に残る台詞があった）
- ④構成（話の流れ、組み立て方が良かった）
- ⑤演技（迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた）

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、生徒投票による賞も選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	1	2人のこれまでと私たちのこれから	広野町
	1	今	大熊町
	8	震災ととある漁業の話	檜葉町
	1	カワイソウジャ、ナイ	富岡町
	6	大切なもの	大熊町
	9	私とヤギができること	葛尾村
B	1	この先のJヴィレッジは	檜葉町
	5	震災と差別	富岡町
	9	どうかかえてください。	双葉町
	6	新妻さんの軌跡	広野町
	1	大熊はずっとある！	大熊町
	8	罪悪感から使命感へ	双葉町
C	2	東電と私	東京電力
	5	「伝えた」のか「伝わった」のか	東京電力
	1	避難後の住民	富岡町
	3	平山さんと震災	富岡町
	7	困難をのりこえて ～ふるさとノカタチ～	檜葉町

2	数十年後の、未来へ向けて	大熊町
2	大熊と未来の人々の為に	大熊町
0		
1	田中秀昭さんの苦難	大熊町
4		

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージや制服姿で演じたが、それでも情景が伝わったのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が本番を観に来てくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だった人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

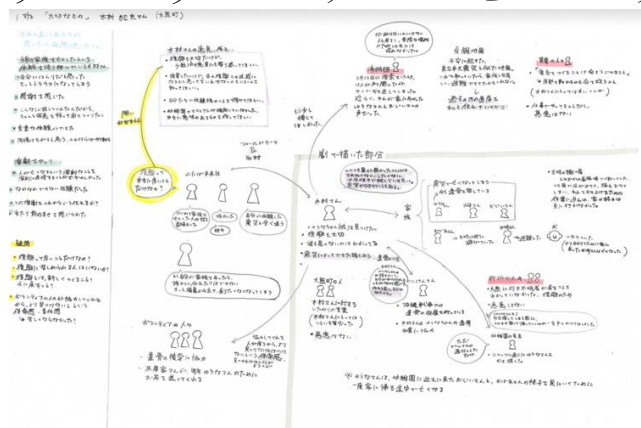
「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのを感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域の方々にとっても有意義な時間となっているようである。



### 1.4 演劇振り返り、リッチピクチャー作成

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化し、お互いの成長を讃え合った。その後、今年度初の試みとして、「リッチピクチャー」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析するWSを行なった。

## リッチピクチャー



リッチピクチャーとは、ある人とそれを取り巻く様々な人・モノ・コトと関係性を表現した図のことである。書き方はおおむね次の通りである。

- ①中心となる人を書く
- ②その人に関係する人・モノ・コトを手当たり次第書く



③場合によってはそれらを並べ直し、グループ化する

④線でつなぎ、それを矢印にする

⑤線や矢印に吹き出し等で、その矢印に関わる感情などを書いていく

更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。生徒たちはイラストを描きながらより相手に伝わるように構造化することができた。最終的にはポスターサイズに印刷し、アリーナにてリッチピクチャーの共有会を行った。自分以外の班のリッチピクチャーを見ることで、20通りの地域課題に触れることができ、その後の探究接続のためのインプットとして大変有意義な時間となった。

#### (6) 振り返りと評価

今年度、明らかにこれまでとの違いを感じたのは創作までのスピードである。話し合いがスムーズに進んだのは、一貫生が演劇と哲学対話を中学3年間通して経験してきたことが大きい。自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話を楽しみながら腑に落ちるまで考え続けることがきる生徒がそれぞれの班に存在していたことで、あらゆる作業がスムーズに進んだ。そういった前向きな姿勢の生徒が大多数を占めていたことで、高入生も自然とその流れに身を任せて創作に集中することができたと言える。実際に、どの班も必要最低限の衝突はあったが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。何より生徒達が協働作業を楽しんでいた。

また、「地域課題を演劇にする」という一見固くありがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れることでどうすればより観客に伝わるかを工夫した。例えば、除染解体作業の現場にいるはずのない女子高生を登場させ、「ねえ、あれ解体じゃない？やばいよね？」といった何気ない会話を挟み、「でも、この人たちどんな気持ちなんだろうね」と、目の前で起きていることを客観的な立場で語るという演劇的にも高度な技術を用いていた。また、解体作業に使われる機械を人間で表現し、瓦礫を撤去する無機質な機械にも感情があるかのような演出をした。

演劇は、舞台上立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考のトレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作ることで自分が論理的に情報を出していないと相手に伝わらない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オリザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するのではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要である。取材をすると、どうしても取材対象に共感してしまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起こるが、そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年次の探究活動に生かしてほしい。

い。

#### (7) 次年度実施への課題

振り返りでも述べたように、意見の違いを越えて協働し合える集団づくりは成功したと言える。地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができたことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地域の課題解決には至らない。

ブレイディみかこ著「他者の靴を履く」では、これからの世の中エンパシーの力が重要だとある。エンパシーとは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことであり、それを「他者の靴を履くことができる能力」として表現している。これに対してシンパシーは「誰かをかわいそうだと思う感情や友情」である。シンパシーとエンパシーの差を示す例がサッチャー元英首相だという。優しく思いやりがあった一方で、衰退した地方の製造業者に厳しく自助を求める経済政策を進め、それに付いて来られない人のケアに心を砕くことはなかったという。「シンパシーはあったが、エンパシーはなかった」と当時の秘書は証言している。人間は顔が見える人（知っている人）の靴は履けても、顔が見えない人たちの靴はあまり履こうとしないものだ。

このことを考えた時に、生徒たちがこの授業を通してなるべく多くの地域の方々と出会い、顔が見える人たちを増やしていくことが、彼らのエンパシーを育てる唯一の方法であると改めて考えた。また、地域の大人たちが考えていることを想像・理解することや、他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず、それが何らかのアクション（未来創造探究）を引き起こすにはどうすればよいかについても考えたい。

演劇を通して他者の人生に触れるだけでなく、その先へ行くにはどうすれば良いのか。震災時の年齢が低年齢化している中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をインプットしていく仕掛けや、今年度のリッチピクチャーのように、演劇と探究をシームレスにつなげられるような仕掛けを、次年度に向けてさらに考えて更新していきたい。



## 2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～  
イラクで約18年、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を世界の課題と繋げて考え、世界平和や国際理解の意義を考えることを目的としている。

- 1 日時 令和4年12月1日(木) 5, 6校時
- 2 講師 イラク支援ボランティア  
エイドワーカー (フリーランス)  
高遠菜穂子 (たかとおなほこ) 氏
- 3 対象 本校1年次生徒、教職員

### (2) 実施内容

演題『戦争の与える影響』 内容を一部抜粋する。

#### 【世界と日本の難民問題】

難民 UNHCR グローバル・トレンドズ 2021 によると、紛争、迫害、暴力により家を追われた人が過去最多の8930万人(10年連続増加)であり、2011年の2倍に増えている。国境を越えたら難民(現在2710万人)、越えないのが国内避難民(現在5320万人)。第三者は簡単に「なぜ逃げないのか」と言うが、様々なところに関門所があり銃を突きつけられ、殆どの場合は賄賂が必要である。お金がないと逃げられず、逃げるのにも命懸けである。難民最多受け入れ国がトルコ(360万人)であるのに対し、日本の難民認定は毎年50人以下に止まっている。非常に悲しいことに日本の入国管理局による外国人に対する人権侵害は深刻である。死者も出ている。スリランカ人のウィシュマさんの事件は記憶に新しいはずだ。このような人権侵害が日本という平和な国で起きていることを皆さんにはもっと知ってほしい。



#### 【市民のトラウマのほかに、兵士のトラウマも深刻】

戦争によって市民が受けるトラウマ(身体的外傷、心的外傷 PTSD)について、目を背けたくないような写真や映像と共に説明を受けた。その際に印象に残った話が、兵士のトラウマについての話である。

「戦争はおぞましく、信じられないほど残酷だが、最初からモンスターはいない。残酷な米兵も家に帰れば一人の息子であり、優しい父親なのだ。想像してほしい。あなたが軍隊という装置の中で、反射的に攻撃できるよう訓練され、軍の規律に従うよう教育され、戦地の究極の緊張状態の中で「敵を殲滅せよ」という命令を受けたら、攻撃され、仲間の兵士が殺されたら、残酷行為をしてしまうかもしれない。でも、ある瞬間に自分が犯した「罪」を意識し、も

う人を殺したくないと思っても、アメリカの軍法では、それは反逆罪になる。兵士のトラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」

#### 【PEACE CELL PROJECT について】

高遠さんが現在取り組んでいるプロジェクトについても話を聞くことができた。テーマは「絵本と演劇で紛争を止める」である。このプロジェクトを思いついたきっかけがまさに本校で演劇の授業と出会ったことだと高遠さんは話している。

絵本の読み聞かせによる情操教育と、演劇を通して彼らの想像力を刺激して、紛争解決できる人を増やしていくのが目的。現在もイラクでは分断が根強く残っている。クルド人とアラブ人、シーア派とスンニ派、イスラム教徒とキリスト教徒 etc...。同じ地域に暮らしながら目も合わせない人たちもいる。現在はコミュニケーションWSが中心だが、最終的には本校と同じように、参加者が自分とは少し背景が重なり合わないような場所に取材に行き、聞いてきたことを演劇にする取り組みにチャレンジしたいそうだ。演劇を通して彼らのエンパシーを高めたいと高遠さんは話していた。(エンパシー: 他者の感情や経験などを理解する能力のこと) ※講演会終了後は、本校の演劇作品をいくつか鑑賞し、生徒たちに熱心に質問をしていた。



#### (3) 生徒の感想

「人間の中には良心と残酷性の2つがあると知った。残酷性のトリガー(引き金)を引かないようにするために想像し続けたい。」

「一国平和主義ではなく、世界の平和を希求するには、軍事行動への参加ではなく、人道支援立国を目指すべきだと学んだ。」

「戦争をしない環境を世界に増やしていきたい」  
「自国の安全のために若者たちを戦地に活かせる政治ではなく、紛争を予防する外交・政治を本気でしてくれる政治家を選ばなければならないと思った」

#### (4) まとめと今後の展望

生徒達は、高遠さんから語られるイラクの現状とその熱量に圧倒されながらも自分達の知識を広げようと真剣にその思いを受け止めた。講演会後も多くが残り、19時近くまで質問が止まなかった。イラク復興と双葉郡の復興を重ねた生徒も多く、探究のテーマに直接繋がった生徒もいたようである。まずは身近な社会から変えていけるよう、引き続き生徒の能動的市民性を育てていきたい。



## 2. 1. 4 1年次未来創造探究

今年度より、1年次から未来創造探究が始まった。1年次前期火曜の6・7校時と夏季休業期間中の授業を「地域創造と人間生活」(以下地創)とし、後期の火曜の6・7校時を総合的な探究の時間とした。

### 1. 概要

前期を中心に行った地創の中では、系列・高入/一貫の区別なくグループを作り、地域の課題を見つめて演劇を製作した。総合的な探究の時間では、「リッチピクチャー」を用い、地創の演劇製作を振り返って地域課題の構造を可視化するところからスタートした。

その後、生徒の中学時代の取り組みや活動の中で立てた問い等をもとに、学年を5チームに分け、チームごとに指導者と対話を重ねながら、課題設定と調査のアクションに取り組んだ。なお、5チームの内訳は、調査グループ1つと課題発見4グループ、うち前者はある程度の課題設定が済んでおり、早期から調査アクションに取り組む生徒集団、後者を課題の発見にいていねいに取り組む集団とした。

### 2. 調査グループ

問いつくり→課題設定→調査アクション→個人面談→プレ発表

調査グループの中には、ふたば未来学園中学からの一貫生が多く含まれている。併設中学在学時の探究活動では、主に福島県双葉郡が持つ観光資源や地域住民の活動に着目し、魅力を知って発信することをゴールに設定していた。そのため、中学時にある程度の発信をし、そこを一区切りにした生徒の中では、高校での活動継続につなげられない場面が散見された。ふたば未来学園高等学校では、課題発見→調査→解決アクションの螺旋構造で探究活動に臨むことになるため、「中学で考えた手段を使っていかに社会を創造するか」という問いに昇華させるよう伴走する必要がある。

地創の授業からつなぐ課題設定の際には、併設中学校時代の探究活動からはいったん離れ、演劇の振り返りや、自分が高校進学後に学んだことや高入生との一貫生の交流の中で見えてきたことを中心に、自らの進路とのかかわりを見出しながら課題設定を行わせるようにした。結果、中学時代に取り組んできたことを調査・解決のアクションに位置づけて探究活動を始めた生徒や、新たな課題の解決に取り組む生徒が混在するチームとなった。

### 3. 発見グループ

調査グループより長めの問いつくり・課題設定→個人面談をしながら調査アクション→プレ発表

高校から入学してきた生徒が多めに含まれるチームであるため、探究活動の導入期は、アインドマップ等を通じたアイデア出しと、それをもとに行う問いつ

りに多めに時間を割いた。また、比較的

早く問い作りが進んだ生徒は調査チームに移動させるなどして、人数は多いながらも、個別最適化を図った。

マインドマップや生徒が立てた問いをもとに、発見チームは4チームに分けて活動を進めた。このチーム分けは、後述の2年次ゼミの再編成計画をもとに、おおまかな学問分野や活動のジャンルによって編成されたものである。ただし、活動中は他のチーム伴走教員からのアドバイスを受けることも奨励し、多面的・多角的な課題設定につながるよう配慮した。

### 4. 今年度の調査実績

#### (1) 新書マップ(<https://shinshomap.info/>)

良質なインプットは書籍から得ることが基本となるが、どのように検索をかければよいのかわからない生徒に向けて、下図のようなサイトを紹介した。



検索ワードを入れて表示されたポイントをクリックすると、参照候補となる新書が本棚に入って表示される。

#### (2) 書籍

調査チームでは特に、授業中の対話の中でおススメの書籍を提示することを多く行った。生徒からは、「いったん書籍を読み始めると、必要箇所がどこかわからないから、結局読まずに済ませてしまうことが多い」「読み終わってから探したものと違うことに気づいて、時間がないうち中読んできたのがっかりする」などの声もあった。そのような経緯で探究の教室や1-4教室に数冊本を準備して紹介することにしたが、「同じ著者の別の本などに挑戦した」など、うれしい報告も聞こえてきた。

#### (3) 新聞データベース

以下のデータベースのアカウントを取得し、調査に活用した。

##### 朝日けんさくくん

1985年以降の朝日新聞や、系列雑誌の記事などを読むことが出来る。

##### ヨミダス for スクール

1986年以降の読売新聞の全国版・地域版の記事を読むことが出来る。

#### (4) 大学院生インタビュー

本校卒業生で、福島大学大学院生の遠藤健次さんをお呼びし、理系の探究活動に助言をいただいた。バイオマス科学会年間奨励賞、日本炭化学会技術部門賞を受賞している卒業生の活躍は生徒に響いた。

### (5) 生徒の活動内容

#### 調査グループ生徒(I.K)

日本地理学会主催 2023 年春季学術大会  
高校生ポスターセッション出場

[要旨] 福島県双葉郡広野町には、晩秋から春先にかけて阿武隈高地からの強風が吹く。地元民が「五社山おろし」と呼ぶこの風は、その実態についてはほとんど研究が行われていない。そこで、本研究では、アメダスのデータや地形の検証を通して、「五社山おろし」の局地風としての特殊性を検証し、その実態を定義付けすることを目的としている。令和3年より続けている本研究では、地元住民へ「『五社山おろし』の具体的な特徴」についてのアンケートを取った。また、1976年から2022年までの広野と他の浜通りの3地点の冬季の気象データを基に、当期間の日最大風速7m/s以上の日数とその風の16風向の割合を調査した。これらの検証結果から、冬型の気圧配置時に西北西から吹く強風が「五社山おろし」とであると考察した。今後は、QGIS等を用いた地形の調査データを集積し、地形の変化で当該強風の特殊性が現れるのかなどの考察を行っていきたい。

<https://www.ajg.or.jp/20230306/16303/>

#### 発見グループ生徒(A, M, Rの3名)

サステイナブルアートに興味を持った3名が集まり調査を行った。調査や担当教員への相談を進める中で、本校7期生までの探究活動でお世話になった方で、NPO法人ザ・ピープルの吉田恵美子様が取り組む、古着のリサイクル活動に興味を持った。吉田様にインタビューを行い、助言をいただいた。実際に作業場を訪れ、ボランティア活動にも参加させていただき、古着を用いたサステイナブルファッションを行おうと考えた。

次に、双葉郡に目を向けてみると、富岡町にオープンしたYONOMORI DENIM (ヨノモリデニム) とのつながりに気づいた。実際に担当教員とお店を訪れ、インタビューをし、お話をお聞きすることができた。

## 5. 課題

昨年度まで、本校高校1学年には総合的な学習(探究)の授業が設定されておらず、「産業社会と人間」や「地域創造と人間生活」のみを履修していた。今年度のカリキュラムから、1学年でも総合的な探究の時間を1単位履修することとなり、観点別評価の導入の時期も重なった。今年度は、担当者間で協力して評価を行ったが、圧倒的に知見の蓄積が足りないという問題がある。

プレ発表実施後に、各会場のアドバイザーの助言をもとにループリック評価を行う十分な時間を確保したい。ループリック面談をしながら、形成的評価・総括的評価について、ゆとりをもつて行う時間を残しておく必要がある。

本校のループリックが Google Forms になった結果、生徒は前回何を書いていたのかがわからず、手元に文章が残らない状態になっていた。例えば、ドイツ研修の参加生徒に参加後のループリック調査・インタビューを行ったが、数日たっただけでも自分が何を記入したのか忘れてしまっているため、Spreadsheet から記述データを印刷し、本人と眺めながら面談をすることになった。

また、自身の成長を実感した場面について、生徒が文章で記入しても、入力した Form が手元に残らない設定であったため、後日発表原稿を作るような場面でも Spreadsheet 上に展開されたデータを個々にデータで返却する手間になった。

各学年では、年度末のLHRの授業内で1年間の学習の振り返り(≒指導要録作成に活かす情報のとりまとめ)を行っている。担任ではない探究活動の担当者にも引き続き協力をいただき、学校全体で形成的評価に生かしたい。



### 3. 3 外部連携

本事業を行うにあたり、令和2年度からコンソーシアムを構成し、双葉郡教育復興ビジョン協議会や福島大学などと連携し、地域から海外まで、様々なグループとの連携を意識的に推進してきた。過去2年間はコロナ禍により現地に赴くことができなかつたり、直接会って話ができなかつたりする等、活動に大きな支障が生じた。一方ではオンラインの活用によって移動の制約がなくなり、時間さえ合えば校内で様々な方と容易に話し合うことができるようになった。オンラインツールは慣れてしまえば大変便利であり、これを活かして逆境をチャンスに変えることにより新たな連の形が進み、生徒の様々な取組が面的、質的、量的に大きく展開してきた。ここでは外部連携の経緯や状況等について、「地域知」と「専門知」に分けてまとめた。

#### 3. 3. 1 コンソーシアム

##### (1) はじめに

令和2年度に結成したコンソーシアム協議会によって、これまで以上に外部連携を強化することとした。また、外部連携が教員個人の繋がりを活用しているケースが多く、長期的に連携を進めるには組織同士で連携する必要性はあるという課題は引き続き解消しなければならない。

##### (2) コンソーシアム

今年度のメンバーは以下のとおりである。

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	笠井 淳一
福島大学 人間発達文化学類	中田スウラ
福島相双復興推進機構	桜町 道雄
福島イノベーション・コースト構想推進機構	山内 正之
NPO 法人カタリバ	横山 和毅
福島県教育庁	丹野 純一
本校校長	郡司 完

今年度は令和4年7月と令和5年2月に協議会を実施した（コンソーシアムの記録については巻末に記載）。

第1回コンソーシアム協議会では、昨年度の取り組みの確認と今年度の研究開発実施計画について説明した。

「グローバル型」最終年度となり、研究成果報告発表会にむけての確認や、令和5年度より開所される福島国際研究教育機構(F-REI)や福島イノベーションコースト構想を実質化していくために、構想と本校をシームレスにつなぐ人材育成の在り方について議論した。

1月の第2回協議会では、2月3日の研究成果発表会を終えて、「グローバル型」3年間の総括とともに今後の展望について総括した。この3年間の中で、8町村すべての自治体と探究を通じての連携をすることができたほか、早稲田大学との連携やNPO法人カタリバとの連携を進めることができた。

##### (3) 今後の展望

今年度は探究カリキュラムの前倒しが行われ、1年前期の地域創造と人間生活における演劇プログラムと1年

後期の連携が一層強化された。地域の分断や対立の構造を人間関係だけではなく社会構造として分析をするための「リッチピクチャー」を作ることで、よりシームレスに探究に接続できた。次年度以降は探究をより高度化させるため、大学等の機関との連携を一層進める方向である。

#### 3. 3. 2 地域知連携

##### (1) はじめに

本校では開校当初から地域の課題探究活動を学校の教育活動の中心に据えてきた。本校が所在する福島県浜通りは震災原発事故が起きた地域であることから、社会課題が顕在化しており、その課題の解決のために頑張る大人が他地域に比べると多い。このような方々を本校では「地域知を持つ方」あるいは単に「地域知」と呼んでおり、開校から8年目となる現在、「地域知」は増えてきており、昨年度から今年度も双葉郡8町村全域での活動を行うことができた。以下に今年度の事例を提示する。

##### (2) 地域知連携

「外部連携を個人的つながりから組織としての網切りにする」ことを目標に、コンソーシアムを軸とした連携を模索した。また、1年次前半に行う双葉郡8町村バスツアーで行った場所・出会った人の影響で1年次後半の探究学習を始まる生徒が増え、生徒が教員を介さずに地域の方々と直接つながる事例が生まれてきた。

・葛尾村との連携：葛尾村で活動している下枝浩徳氏（葛力創造舎）との協力から、演劇部を中心に「宝宝宝」の演劇上演や、葛尾村で伝統的に行われていた「祝言式」に携わる中で「愛とは何か」というテーマでの探究活動が始まった。

・富岡町との連携：リメイクデニムの専門店「YONOMORI DENIM (ヨノモリデニム)」と協働し、資源をアップサイクルする探究や「海」をファッションで表現する探究などが生まれている。